第四章　齋夜と、陽

1.

自分は、弱い人間だ。陽はそう思った。

齋夜は音も立てず、いつの間にか消えていた。

陽は何も気づかなかった自分が本当に厭だった。もしかすると、半ば意識を失っていたのかも知れない。それすらはっきりしないほど、陽は疲れ切っていた。

胡乱で空虚な胸の内には、後悔の念しか浮かばない。

確かに齋夜と口喧嘩した。霧の中、大声で叫びあった。そこははっきりと憶えている。あんなことをしたのは初めてだった。齋夜が一線を越えて怒ることは今までにもあったけれど、そうしたときも陽は、常に平然と齋夜をいさめていた。いや、そう見えるよう振る舞いながら、いつも放っておいていた。いさめるような振りをしていただけだ。別に齋夜を止める必要もない、と思っていたからだった。齋夜は人目など気にする必要はないと、ずっと思っていた。

けれどさっきは、どこで自分は間違えたのだろう。あんなみんながいる前で、あんなに自分の感情を露わにすることなど、今まで生きてきて一度もなかった。

それとも、だからこそ、間違えたのだろうか。

もっと普段から自分の気持ちを見せていれば、せめて齋夜にだけでも見せていれば、違っていたのではないか。こんなことには、ならなかったのではないか。

けれど陽には、自分の気持ちというものが、どうにも分からないのだった。

言葉に出来ない気持ちは自分にも他人にも掴むことが出来ず、そして無理をして言葉に作り替えようとしたら、やっぱり齋夜には伝わらなかった。

それだけだった。

陽は、自分がどこまでも虚ろになっていくのを感じていた。

齋夜がいなくなったことに皆が遅れて気づいたときも、陽は何も言わず、ただ立ちつくしているだけだった。自分の後ろでおとなたちが騒がしく喋っているのを聞いて、久方ぶりの低い落着いた声の響きを、少し面白く感じていた。やはりおとなの声とこどもの声は、聞こえ方が違う。おとなの声は低く小さく、人に聞かせる気のない、自己満足の声だ。そしてこどもの声は、何を言うにも高く大きく、人に聞いてもらうための声なのだ。自分や健太の声もすっかり低くなったと思っていたけれど、まだまだなのだな、と陽は思った。

ぼんやり聞こえる彼らの話からすると、齋夜がどこへ行ったか誰も分かっていないようだった。町会長は、あの子がそばを通り過ぎる気配は感じられなかったから、きっとあのまま石段を上って神社へ向かったに違いない、と何度も自ら頷きながら主張していた。そして、あの子を神社へ探しに行こう、何があったか私にはよく分からないが、とにかくちゃんと、保護してやらないと、とも言った。可笑しさに、陽は小さく肩を揺らした。

霧に捲かれて何も見えないこんな状況で、彼らに齋夜の気配など、分かるものか。

他のおとなたちと、それから彼らにしっかり手を握られた健太、崇嗣、弥生の一団を引き連れ、町会長は神社への石段に足をかけようとした。

その前にすい、と身を割り込ませて、陽は彼らを止めた。

「ん？　どうしたの陽くん」

町会長の薄ら高い声が、はっきりと陽の耳に届く。

「いや、その」喋りながら、陽は理由を考える。「たぶん齋夜は、帰ったんじゃないですか、その、家に。そうだと思います」

「でも、こっちには来なかったとみなさんおっしゃってるしねえ」

「でも」ふと思いついて、陽は言った。「僕は目の前で見てましたから。齋夜は、神社へは向かってません。僕の脇を通ってあっちに、家の方へ向かいました。ちょっと今は疲れているみたいなんで、とりあえず今日は、独りにしておいてやってくれませんか。よければ明日にでも、僕が見に行きます」

町会長に喋らせると長くなって面倒なので、陽はほとんど一息で言い切った。すると町会長は、太ってたるんだ首で何度も頷いた。
「うん。やっぱりしっかりしてるねぇ君は。さすがはあの大先生のお孫さん、若先生の息子さん。島の将来は安泰だ。よろしく頼むよう」
俺が、しっかりしてる？
早くも階段に背を向けて帰路につく町会長に目を向けながら、しかし陽は、もう何も見ていなかった。
また何かが抜け落ちて、虚しさが募る。
もちろん、言ったことは嘘だった。夢うつつを彷徨いながら最後に話しかけている間に、齋夜はどこかへ消えてしまった。どこへ行ったか、陽は知らない。
そして、町会長の考えは正しいと思う。陽の思う限り、あのまま石段を登って神社へ行き、あの場所へ行ったと考える方が、少なくとも自分の知っている齋夜の行動としては自然だった。
あの場所へ。

なぜ今、自分はそんな嘘をついたのだろう。
贖（あがな）いなどという大仰な言葉が頭に浮かんで、陽は苦笑した。
理由は明らかだ。

町会長は一人でさっさと帰ってしまったが、他のおとなたち、親、そしてひとみ先生は、まだ残っていた。ひとみが、陽のそばまでやってくる。
「ようちゃん」
少しおどけるような口ぶりで、彼女は言う。陽も、小さく笑う。
「お帰りなさい」
また、彼女はそう言った。その後ろには、淡々とした表情の雑貨屋の息子、確か脩一とかいう人と、陽の兄が居心地悪そうに立っていた。陽は兄を見た。彼は陽の視線に気づくと、片眉を下げて、ひねた表情を浮かべた。けれど、彼は陽から目をそらさなかった。それに陽は、少し驚いた。
健太、崇嗣、弥生は、それぞれの親と共に、やはり残っている。
三人とも、いつの間にかしっかりと落着いた眼差しになっていた。

それは、何を見るための眼差しなのだろう。
自分も、こうなっているのだろうか。
そして自分たちのこの眼差しが、不安に怯えた齋夜の目に、どう映ったことだろう。
「とりあえず」ひとみは言った。「何があったか、教えて」
陽は少し逡巡する。その様子を見て、ひとみは問うた。
「長くなる？」
「いや」陽はすぐに首を振った。「別に何があった訳じゃないし」
そう。何があった訳でもないのだ。
なのに、何が変わったのだろう。

陽は十分ほどで手短に、祭の後から何があったかを一通り話した。
十分で沢山だった。
その間誰も口を挟むことはなく、ただ頷いているだけだった。
弥生の父は、にわかには信じがたいという顔をしていた。健太の母に至っては、何のことやらさっぱり分かっていない。しかしそれも当然だった。
もう陽自身も、信じられないのだから。
きっと他の三人も、同じ気持ちだろう。こうして普通に話していると、あんなことが本当に起きたとは思えない。あんな時が、本当にあったとは思えなかった。今や確かめようがない。なにかもう、自分の記憶の中だけにある、嘘か夢のようで、とても信じられなかった。
そして齋夜は今、その嘘か夢の中にいる。
話が終わると、ひとみは言った。
「うん。それで、どうしようか」
ひとみは、あくまで平然としていた。こんな人だったろうか、と陽は少し不思議に思った。もっと感情的に、正直に、はっきりと語る人だったような気がする。
「どう、するか」
なんとなく、陽は足下を見る。
しなびた草が生えていた。
陽は応える。

「どう、って？」
「ゆうちゃんのこと」
「さあ」
陽は半ば無意識のうちに、そう呟いた。
一瞬後に失敗した、と気づいて言い直そうとしたけれども、誰も何も咎めなかった。他の誰か、健太あたりが、なんだその言い方は、などと叱ってくるかとも思った。しかし、誰も口にしない。
もうみんな、疲れたのだ。どうすればいいどうすればいいと考えることに、もう倦んだ。倦んだから、自分たちは今、こちら側にいる。
だからもう、誰も問わなかった。
「そう」
ひとみはそれでも変わらず、あたかも何事でもないかのように言った。そうして、小さく頷いた。陽は顔を上げて、彼女の目を見た。真っ直ぐ目が合った。
まるで揺れず、まるで動ぜず、むしろ優しい雰囲気をたたえている。
それが何を意味しているか、今の陽にはまだ、分からない。
「帰ろっか」
唐突に、彼女は言った。
そして踵を返し、一人先に道を歩いていった。
後ろ姿は、毅然としていた。
その姿を見て、どうして毅然としていなければならないのだろうな、と陽は考えた。
ひとみの姿が消えた頃、ようやく他の親たちも、ゆるゆると家路へと歩み出す。彼らも彼らなりに、憔悴しきっているようだった。すっかり霧も深く、空気は生暖かく、辺りは暗かった。たぶんまだ六時にはなっていないはずだし、そう考えると夏にしては異様に暗い。早く帰りたくなるような、ぼうとした空気だった。
健太も、崇嗣も、弥生も、それぞれに疲れ切っている。聞こえるようになってから、なぜだか急に、疲れてしまったようだった。何を話す気力も失っている。それは、今を過ぎれば甦るものなのか、それとももう二度と戻らないものなのか。陽には分からない。

ただ、きっともう三人とも大丈夫なのだろう、とだけ、陽は思った。結局のところ、初めからみんな大丈夫だったのだ。それをやっと認めることが出来るようになった、というだけのことだ。みんな、もう迷うことはない。

三人が、親と共に霧の道を歩く後ろ姿を、陽は見ている。

たぶん、よかったのだろうな、と陽は思った。

みんなの姿は、霧の中に消えた。

「陽」

呼びかけられて、陽は顔を向ける。母だった。そういえばこの人もいつも、優しい顔をしていた。

続く言葉を陽は待っていたが、母は何も言わなかった。

「先、帰ってて」

陽はかろうじてそう言った。母はただ、頷いた。

「晩ご飯までには帰ってきなさいね」

そう言うと、母は行ってしまった。たちまち姿は、霧の中へ消えた。

そして、陽は一人になった。

もう、逃げたかった。

確かにみんな、もう大丈夫なのだろう。確固たる何かは、もちろん三人とも無いままだ。けれどそれは、誰だってそうなのだ。世の中何かしっかりした足場であるように思えても、おおよそいずれも泥沼のようなもので、たまさか何かの具合で立っていられるだけだ。でもそれでいい。嘘だろうが間違いだろうが騙されていようが、立っていられればよい。

そして三人とも、これからはきっと立っていられる。いや、元々立っていたのだ。揺さぶられたのはたぶん、足場がもう今の身の丈に合わなくなっていただけで、だから組み直した。それで、またこれからも、立っていられるだろう。

けれど、陽には。

最初から足場など無かった。外からは頑強な立ち位置にいるように見えても、やはり何も無かったのだ。無いままで十七年間、ふわりふわりと生

きてきた。そんなこと、普段は意識することなどない。努めて意識していなかったのに、こんなことが起きて齋夜の家にいるうちに、その思いはますます強くなっていった。自分には何もない。何も出来ない。そして強引にすべてを忘れるため、家へ帰ろうとしたら、たちまち何もかもが雲散霧消した。

齋夜すら失った。

陽はもう逃げたかった。自分はこのまま順調に医者になったって、みんなのように安穏と生きることは出来ない。透けるように未来が見える。それが怖い。どうしようもなく怖かった。自分の虚ろな人生が、恐ろしかった。

いつからだ。

こどもの頃はきっとそうじゃなかった。

いつから虚ろになったのだ。いや、いつから虚ろだと気づいてしまったのだ？

そう考えたとき、すべてが一つの元へ集約された。

虚ろも怖れも不安も、元をたどれば一人のこどもに端を発していた。

あの子が、

そして、齋夜の顔が浮かぶ。

静かに笑う顔だった。

いつだって齋夜は、どうしようもない気持ちにさせる。

抱きしめたくなる。

そうして、虚ろな自分を満たしてくれたのだ。

いつだって、

そうか、こどもの頃いつも満たされていたのは、

齋夜が、

そばに、

陽は混乱し迷走し筋道立たない自分の考えに、次第に強烈な怒りと一種の憎しみを感じ始める。ひとたび生まれたそれらの感情は、すさまじい速度で膨張を続ける。胡乱な自分は単に穴埋めのためにいつも齋夜を求め、

それがなにもかもを引き起こしたのだとそう気づいてしまった。気づいてしまえばもう、逃れることは出来ない。自己嫌悪と不安にさいなまれて、苛立ちは限りなく強くなっていく。さっきだってこっちへ来いと言ったのは齋夜のためじゃない、自分のためだ。齋夜がいてくれれば自分の空白が暖かく埋まるから、それだけを求めて自分はあんなことを言ったのだ。確かにそうだ。考えれば考えるほどに陽は自分の中から傲岸で利己的な部分ばかりを見いだし、底知れない不快感を湧き上がらせる。石段の前に広がる霧と闇の中一人ぽつねんと立つ陽は、外見は無表情に冷静にありながら、心中は自分で途方に暮れるほどの爆発的な怒りで壊れる寸前だった。目はかっと開いたまま、陽は一歩も動けずにいた。動けば何を破壊してしまうか分からなかった。自分自身で恐怖を感じるほどの怒りはぶつけるための相手を求めていて、それは最早、自分自身に向けられるほかなかった。誰にも何にもぶつけるべきではない。もう逃げたかった。

その時陽は、

足下にねこがいることに気づいた。

真っ白なねこだった。

ねこが、なあ、と鳴いた。

そうだ。

もう一度あの場所へ行こう。

陽はそう思った。

そして、霧の中へ踏み出していった。

ねこが、なあ、と鳴いた。

2.

ぼくはガラス戸を閉じると、薄暗い自分の家の中を見た。靴を脱ぎ、框に上がり、そのままきしむ廊下をずるずると足を引きずるようにして歩く。窓からは、光の澱んだ霧だけが見えた。

ひどく疲れていた。

居間の障子を開ける。
誰もいない。
さっき見たときは、そこの机の脇には崇嗣が座っていたしあの窓から健太は外を眺めていたし弥生ちゃんは足を崩してこの畳の上にいたし、
陽はその壁にもたれて、本を読んでいた。
今、そこには伏せて置かれた本だけが残っている。
ぼくは本が悪くなるといけないとぼんやり考えて、居間へ入ると本を手に取った。
これを読んで、陽は何を思ったのだろう。
ぼくは陽の読んでいたページをふと、見遣った。
『ている巫女はムラ、すなわちある特定の村落共同体の中心に、常に、あるべき存在として重要視され、崇められると同時に一種の責』
ぼくは本を閉じた。
日焼けした古いその本は独特の臭気を放ち、弱ったページは所々外れかけている。ぼくは歪みがないよう本全体を整えると、少しの間、大切に抱いた。
力が、抜けていく。
ぼくは、そのまま座り込む。
もう、疲れた。
ぼくは顔を上げ、部屋を見る。
灰色の居間だった。
天井も柱も机も床の間も、真っ黒だ。畳は灰色にくすんでいる。そして外からももう、光は射さない。動く気も起きない。そして家は、どこまでいっても静かだった。
すべてはもう死んでいる。
何もかも壊したくなった。
あらん限りの力で暴れまわる。窓をたたき割り障子を破り、柱をへし折りふすまを押し倒す。家具は木片になるまで砕き尽くす。道具など使わない。全部自分で素手でやる。自分か家か、どちらが先に駄目になるかは、やってみないと分からない。とにかくやってみる価値はある。
けれど、疲れていた。

そうでなければやっていたろうに。
残念だな。
小さく丸くなって、ぼくはしばらく座っていた。
目を瞑れば、今すぐにでも眠れる。
自分がこの上なく優しい表情をしていることに気づいていた。
ああ。
這うようにして、机のそばまで行く。
机はさわると、冷たかった。ぼくは本を置く。
静かだ。
もたれかかる。
片耳を机につける。
何も聞こえなかった。
もう何も聞かず、語らず、
残るのは、
独りの安らぎだけだった。
ぼくは目を瞑る。
眠る。

音が、

ぼくは目を開ける。
部屋は真っ暗だ。外はもう、すっかり日が落ちている。
どのくらい寝ていたのだろう。ほんの一瞬の気もするし、ずっと眠り続けていたようにも思える。顔を上げると、少し首が痛かった。
今なにか、聞こえたような。
まだ朦朧としている。息を吸い込む。
ぼうとして揺れて定まらず、また眠ってしまいそうだった。
眠ろうか。
すると、また何かが聞こえた。
家の中だ。
途端に意識が定まり、不安に駆られたぼくは、辺りを見回して音の元を探った。
なにか、台所の方から聞こえる。
無理をしてぼくは立ち上がる。たちまち強烈な立ち眩みに襲われ、倒れそうになった。しゃがみ込み、頭を抱えて、目を固く瞑る。
水が流しに落ちる音が聞こえた。
再び息を吸い込み、そしてぼくは廊下へ出る。
台所のドアの曇りガラスから、明かりが漏れていた。
うっすら橙がかった光が、真っ暗な廊下に四角く落ちている。
とんとん、と包丁の音が聞こえた。
ぼくは、そちらへ向かって歩いていく。
暖かい匂いがする。
ノブを掴み、開ける。
そこでは、
おばあちゃんが料理をしていた。
「あれ、ゆうちゃん起きた？」

振り向くと、おばあちゃんは言った。
「ごめんね、おばあちゃん今起きたところでね。ご飯もうちょっとかかるけど、待ってられる？」
ぼくは頷く。おばあちゃんはにっこりと笑って、料理に戻った。
着物の上に白い割烹着を着たおばあちゃんは、菜っ葉をまな板に載せて切っていた。鍋の中では味噌汁が煮立っている。炊飯器からは湯気が漏れている。
「おばあちゃん」
ぼくは言う。
「なあに」
背を向けたままおばあちゃんは応える。
ぼくは何も言わなかった。
おばあちゃんは切り終えた菜っ葉をまとめて包丁の上に載せ、味噌汁の鍋の横の、別の鍋へ流し入れた。
「お魚の煮物とね、菜っ葉のおひたしと、お味噌汁とご飯ね。ええかなぁこれで」
「あ、うん」
ぼくは、慌てて応えた。
「おばあちゃん、手伝うことない？」
すると手を止めたおばあちゃんはゆっくりこちらへ振り向いて、本当に嬉しそうに笑んだ。目も細めて、顔中がやわらかなしわになる。
「ええ子だねえゆうちゃん。ほんに優しいねぇ」そして目を開いて続けた。
「大丈夫よ。ゆうちゃんは、そうね。居間の机、布巾で拭いといてくれる？」
ぼくはまた頷く。布巾を手に取ると、小走りで居間へ戻った。戻りながらも、ぼくはずっと台所を目の隅に入れて見ていた。なんとなく、不安だったからだ。
やかんの笛の鳴る音が響いた。
やがて、料理はすべて出来上がった。おばあちゃんと一緒に、居間まで運ぶ。ぼくが味噌汁の鍋を持とうとすると、おばあちゃんは大急ぎでやってきて、あかんあかん熱いから、おばあちゃんみんな持ってくから、ゆうちゃん待っといて、と言った。そういうわけにもいかないので、一番冷め

ているおひたしの鍋を、ぼくは持っていった。
「気ぃつけてねぇ」
それでもおばあちゃんは台所から大きな声を出すので、ぼくは苦笑いした。
そうして、晩ご飯が始まる。
さあ食べよう、というときにふと、おばあちゃんは何かに気づいた様子ですっと立ち上がった。どうしたのだろうと見ていると、おばあちゃんは窓際まで歩いていき、首をかしげて外を眺め、それから露のついた窓を開けた。
外の少し涼しい空気が入ってきた。
「あら、えらい霧」
おばあちゃんはそう言っただけで、窓を閉めた。戻ってくる。
「何を思うておられるのか」
もぞもぞと座りながらおばあちゃんが、真顔でそう呟いたように聞こえた。ぼくは聞き返す。
「え？」
「なんでもないよ」
そう応えるとおばあちゃんは、手をしっかりと合わせ、目を閉じて言った。
「いただきます」
ぼくもきょとんとしたまま、手を合わせて言った。
「いただきます」
心地好い夕餉だった。
おばあちゃんの作ってくれた料理を食べるのはかなり久しぶりだったけれど、前と変わらない味だった。ちょっとだけ味が濃い。でも、美味しい。ぼくが作るのと全然出来が違うのはなぜだろう。ぼくの料理もおばあちゃんに教えてもらったのだから、作り方は同じはずなのに。そんなことを考えながら、ぼくは一口一口、ゆっくりと食べていた。
ぼくが香ばしい魚の身を食べていると、おばあちゃんは尋ねた。
「ゆうちゃん、どう？」

「美味しいよ」
ぼくはすぐに応える。
「そうじゃなくてね。ここのところ調子は、どうかなと思って。なんだかゆうちゃん、今、疲れてるように見えるから」
「うん」
「何かお話ししたいこと、ある？」
そう訊かれて、ぼくは少しの間口をつぐみ、考えた。けれど、おばあちゃんはいつまでも待っていてくれる。話したいことは、訊きたいことは、いくらでもあった。長い間に積み重なった、分からないこと、大切なこと、お祖母ちゃんにしか応えられない色んなことが、ぼくの中でゆっくりと、流れを作っていた。
きっと今、訊くべきなのだ。
何から訊けばよいのだろう。
黙ったまま、ぼくはごはんを噛んだ。
身体が、あたたかくなった。
やがて、ぼくは口を開いた。
「お父さんと」言葉を選び、迷う。「お母さんは、どうして」
どうして、島から出たの。
どうして、船に乗ったの。
どうして、船は沈んだの。
何と言って訊けばよいのか、分からなかった。
おばあちゃんもうつむき、少しの間考えていた。それからしばらくして、呟くように応えが返ってきた。
「こわかったんかねえ」
「こわかった？」ぼくは問い返す。
「うん」おばあちゃんは頷いた。
「何、が？」
ぼくが訊くと、おばあちゃんは目を細めて、流すように静かにこちらを見た。おばあちゃんは時折そんな、こちらがひやりとするような、冷たい表情を浮かべることがあった。若い頃は、きっと美人だったのだろうな、といつも思う。いや、今だって綺麗だ。

そしておばあちゃんは目を瞑ると、そっと一言だけ続けた。
「この島が、ね」
ぼくは口をつぐんだ。
どういう意味だろう、と思った。お母さんはこの島が、こわかった。生まれ育ったこの島の、一体何が、こわかったのだろう。あの暗く豊かな森だろうか。それとも、果てなく深まる海だろうか。それとも、岩場の海岸、海岸沿いの洞窟、切り立った崖の灯台、寂れた小さな町並み。それとも、艶やかに流れる川、無限に並んだ石像、沈黙する神社、いつまでも繰り返される、祭と松明の力と輝き。
それとも、そんな全てが、
こわかったのだろうか。
ぼくはなんとなく、分かる気がした。
「ゆうちゃんも、こわいでしょう。いろんなことが」
「う、ん」
ぼくは返事につまり、口籠もる。おばあちゃんは遠い昔を思い出すように、ずっと向こうを見ていた。
「あの子は、ゆうちゃんのお母さんはね、小さい頃から、気心の優しい子だったから。優しい子にはいつだって、こわいものや、つらいものが、たくさんあるんだよ。だって、嘘がつけないからね」
ぼくはただ、頷いた。
おばあちゃんは微笑む。
「嘘がつけない人は、悩んで、苦しんで、それから、逃げるしかないから」
「じゃあ、お母さんは、逃げたの？」
ぼくは、強く胸が痛むのを感じた。おばあちゃんは急須からお茶をゆっくり注ぎ、一口飲んだ。
そして、続けた。
「逃げたのか、それとも、先へ進んだのか」
「それは、何が違うの？」
「同じだよ、やってることはね」
そこでおばあちゃんは、目を伏せた。
「でも、許されなかった」

「だから、船が沈んだの？」ぼくはまた、重い気持ちになる。
「そう」おばあちゃんは肯った。
船が沈んでいく姿が、目の前に見えた気がした。
それなら、
「許さなかったのは、誰？」
誰？
ぼくは問う。
そして、胸に浮かぶ言葉を口に出そうとする。
「それは」
それは、きっと、
「違うよ」
何も言わないうちに、おばあちゃんは笑って、首を振った。
「それは違う。そんなことをなさることは、ないよ」
「じゃあ」
「許さなかったのは」
おばあちゃんは少しだけ、寂しそうな顔をした。
「あの子自身だよ」
少し待って、ぼくは頷いた。
きっと、そうなのだろう。
「ほら、もっと食べて」
そう言って、おばあちゃんはおひたしの鍋をぼくの方へ押した。ぼくは頷いて、それを口に運ぶ。出汁で煮詰めた菜っ葉はほんの少し苦くて、それが美味しかった。
「この島に生まれて生きるというだけで、まっとうな人は皆、すくんでしまう」箸を動かすぼくを見ながら、おばあちゃんは言った。「望んで生まれたわけではないのにねえ。誰だって、怯えるよ。おばあちゃんだってそうだった」
「おばあちゃんも？」
ふっくらとした炊きたてのご飯を口に含んだまま、ぼくは訊いた。
「これ」ぼくのお行儀の悪さをいさめてから、おばあちゃんは続ける。「それはね。ある時、ふっと気づくんだね。あれ、自分がいるところは、随分

と恐ろしい場所だな、って。いつの間に自分は、こんなとこに来たのか、ってびっくりする。それからが大変だ。どうしよう、ってなる」
「どう、するの」ぼくは箸を止める。
「まず簡単なのは、まっとうじゃなくなればいい」
それを聞いてぼくが不満げな顔をすると、おばあちゃんは声に出して笑った。
「冗談だよ。でもね、これが簡単。だから、そうする人が多い。でしょう？」
ぼくは頷く。本当に、そうだろうと思った。
「二つめは？」
「さっき言ったとおり、逃げてしまえばいい」
ぼくはふと、思い当たった。
「じゃあみんな、島の人達がみんな、島から出て行っちゃうのは」
「逃げる先は、島の外とは限らないさ」
おばあちゃんは、そんな不思議なことを言った。
「でもそうだね。ほとんどの人は何にも分かってないまま、今居る場所の悪口吐き散らして、どこぞへ行ってしまう。ちょっと言葉が汚かったかね」
ぼくは笑った。おばあちゃんはぼくの眼を見ると、こう訊いた。
「でも、それなら、どこまで逃げれば済むと思う？」
「どこまで」
考えてもみなかったことを問いかけられて、ぼくは口をつぐんだ。
「どこへ行っても変わらないものは、なんだろうね」
ぼくは考え込んでしまった。おばあちゃんはにっこりと笑む。
「まあ、自分で逃げてると思ってるうちは、だめだね」
そして、ほら食べて食べて、おばあちゃんはもうお腹いっぱい、と言った。
「お母さんは」ぼくはふいに思い至って、口をつくように尋ねた。「お父さんは」
おばあちゃんはさっき、二人は逃げたのだ、と言っていた。それなら、お父さんもお母さんも、そんな情けなく逃げ出す人達と、同じだったのだろうか。
「ああ」

おばあちゃんは、ぼくの味噌汁をよそいながら、深く息をついた。
「二人とも、ようく、分かっていたよ」
「お父さんも？」
「もちろん」味噌汁の器をぼくの前に置いて、おばあちゃんは、はっきりと応えた。「よく、ちゃんと、分かっていた。自分達が今、何をしようとしているのか、逃げるっていうことの意味が、何なのか、お母さんが、どんなに畏れているのかもね。分かっていたから、だからお父さんは、お母さんを支えようと思った」
「でも」
ぼくは、泣き出しそうになった。
するとおばあちゃんは、箸を置いたぼくの手を、横から握ってくれた。とても、やわらかな手だった。
おばあちゃんはきちんと、こう言った。
「ゆうちゃんのお父さんも、お母さんも、立派な人たちだった。自信を持っていいよ。立派な人たちだったから、だから、許せなかったんだ」おばあちゃんはぼくの手を、優しくさする。「ごまかして島に居続けることが、出来なかった。いい加減には、済ませられなかったんだ」
ぼくはやっと、心が落着いた気がした。
それから、また少し食べた。熱いお味噌汁を飲むと、ふう、と内側から、気持ちが和らいだ。
そういえば、こんなきちんとした食事を取るのも、何日かぶりだった。
「三つ目はね」おばあちゃんは数度瞬きして、また話し始めた。「忘れることね」
「忘れる？」
「そう」
おばあちゃんは頷く。ぼくはなんだか、変な気がした。
「忘れるのと、逃げるのは違うの？」ぼくは首をかしげた。
「全然違う」おばあちゃんは、なんだかおどけたような口ぶりで言った。
「逃げるのは、憶えているからでしょう？」
確かに、そうだ。ぼくはさらに訊く。
「何を忘れるの？」

「全部」
「全部って」
なぜかぼくは、それに罪悪感を感じた。おばあちゃんは言う。
「不安や怖れは、いつかは忘れられるよ」
「でもそれじゃあ」ぼくは混乱する。「何の解決にも、ならない」
「解決ねえ」今度はおばあちゃんが、首をかしげる。「でも、どうして解決しないといけないの？　そもそも、何が問題だったんかねえ」
ぼくは答えられなかった。おばあちゃんは続ける。
「忘れるんは、許すんと同じことやね。許すからこそ、忘れられる」
「そうやって忘れていけば、そのうちこわいことも、なくなるかな」
「いいや。なくならないね」
おばあちゃんは当然のように応えた。ぼくは驚いた。
「なくならないの？」
「なくならないね。おばあちゃんはそう。今も、そう。ゆうちゃんくらいの頃から、いくつの時でもずっと、何かがこわかったね」
「今も？」
「そうやね」
ぼくにはどうも、そうは見えなかった。そんな気持ちがぼくの表情に出ていたのか、おばあちゃんは苦笑いした。
「そりゃあ、そのうち慣れるからね」
「じゃあ、どうすればいいの」
「だから、みんな、忘れる。厭なことや怖いことが出来たら、一つずつ一つずつ、忘れていくの。そうやって、なんとかがんばって、生きていけばいい」
ぼくは前へ向き直ると、窓の外を、じっと見つめた。
外は真っ暗で、何も見えない。何もないみたいだった。
そのせいで、明るく照らされたぼくらのいる居間の方が、嘘のように見えた。
そんな風にしか、生きられないのかな、と思った。
「そうやって忘れていけば、いつかは赤ん坊の頃に戻れるでしょう。何にもなかった頃に」

おばあちゃんは暖かく微笑むと、ぼくの方を向いて言う。
「そうしたら、きっと幸せになれるから」
ぼくは、どうしようもなく悲しくなってしまった。
「ほら、ご飯の続き。話はまた後でも、出来るからね」
そうしてぼくとおばあちゃんは、晩ご飯に戻った。

どんなにゆっくりと食べても、夕食は終わってしまった。おばあちゃんと一緒に、片付けをする。
これはそこにしまってね、拭いといてくれる、ありがとうねぇ、あれ手伝ってくれるの、上手にしてくれるねぇ、助かるわ、ほれ、出来た。
おばあちゃんのそんなしわがれた、けれど柔和な声が、ぼくの気持ちをほぐしてくれた。
そして、肩の力が抜け、身体の疲れが落ち、ようやく胸の底から、息をつくことが出来た。
身体が癒えれば、心も治る。ずっと緊張が張り詰めていた、ということにさえ、ぼくは気づいていなかった。こんなに平穏な心持ちになれたのは、どれだけぶりだろう。
いつからぼくは、疲れ続けていたのだろう。
何のためにぼくは、疲れ続けていたのだろう。

もう一度深く深く息を吸い込み、そして吐いた。
身体の中に張り付いたあらゆるものがこそげ落ちていき、
後に残ったのは、ぼくだけだった。

片付けも終わり、ぼくとおばあちゃんは、綺麗に拭いた机に向かい合わせで座っている。
「ゆうちゃん、嬉しそうやねえ」
え、と思って、ぼくは自分の顔に手をやった。どうも気づかないうちに、笑顔でいたらしかった。ぼくは赤面した。
「綺麗なお顔。お母さんにそっくりやわ」

こう言われる度に前は傷ついていたけれど、今はもう、平気だ。
嬉しかった。
「お話って、何？」
おばあちゃんは尋ねた。
それでぼくは、話を始めた。
陽たちが帰ってきた日から、祭、そしてその後何が起きたか、一つ一つを丁寧に、おばあちゃんに話した。これ以上なく、丁寧に話せた。言葉に詰まると、おばあちゃんが助け船を出してくれたし、言い足りないところは、ちゃんと問い直してくれる。話すのが恥ずかしいようなことも、急かすことなく待ってくれる。
嘘や混乱や空虚や秘密は、おばあちゃんと話していると無意味だった。
ぼくは全てをそのままに語り、おばあちゃんはそれを、ゆるりと聞いてくれた。
「大変やったねえ」
こともなげに洩れるおばあちゃんの言葉の優しい響きは、ぼくを救ってくれる。
こんなに心静かな気持ちになれたのは、どれだけぶりだろう。
そうしてぼくは、順を追って間違いなく、確実に話していった。すると、話すというだけで、胸の内にあった雑多な記憶が、あるべき場所へ戻され還っていくのが、はっきりと感じられた。全ての出来事が、ぼくの中で一つの形に整理されていくのだ。それは、説明でこそなかったけれど、僕にとっては何よりもしっくりと、納得の出来る形であって、だからぼくの中からは、次第に不安や疑問が、静かに消えていった。
けれど一方で、ぼくはそれをどこかつまらなく、寂しくも感じていた。
雑多だからこそ、思い出なのかも知れないな、と、話しながら思った。
ぼくは、話を終えた。
「信じてくれる？」
ぼくは最後に、上目遣いでおばあちゃんを窺うようにして、こう付け加えた。
おばあちゃんは、目を丸くして訊き返した。
「嘘なの？」

ぼくは首を振る。
「だったら、本当なんでしょう」
目を細めて笑うおばあちゃんは湯飲みを持ち、黒々とした机の表面をじっと見据えていた。つられてぼくも見ると、天井の蛍光灯が映って、丸い光を描いていた。
「よう、耐えたね」
おばあちゃんはぽつりと言った。
「つらかったろうに」
涙が出そうになったけれど、ぼくはこらえた。今はまだ、泣きたくなかった。
「きついことしなさるわ。ねぇ」
誰へともなしに、おばあちゃんはそう言う。ぼくは黙ったままだった。するとおばあちゃんも、うん、と言ったきり、話さなくなってしまった。
まるで、世界がここしかないみたいに、静かになった。
「ゆうちゃん」
ぼくは顔を上げる。
「おとなとこどもは、何が違うと思う?」
おばあちゃんはそう、ぼくに向かって問う。
おとなとこどもは、きっとそれは、
それは、
「そう」
おばあちゃんは頷いた。
言うまでもない。とっくに、分かっていることだ。

もう、終わりが近づいているのだ。
ぼくがただ、それを認めたくなかっただけだ。

おばあちゃんは、いたずらっぽく言った。
「そんな悲しいお顔することないの」
ぼくは唇を噛んで、うん、とだけ言った。そして顔を上げて、おばあちゃんを見る。柔らかな笑みを浮かべたまま、おばあちゃんはぼくのことを

見ていてくれる。
もう少し、もう少しだけこうして、一緒にいさせてください。
誰へともなく、ぼくは心の中で、そう願った。
「ゆうちゃん」
深く優しい声で、おばあちゃんは愛おしむようにぼくの名を呼び、頭をなでてくれる。

ぼくの、おばあちゃんだ。

「おばあちゃん。ぼく、行くね」
ようやく決心をして、ぼくは立ち上がる。正座していたおばあちゃんは、そのままでぼくの顔を見る。そうしてゆっくりと、頷いた。
「行っておいで」
おばあちゃんもよっこいしょ、と腰を上げた。
ぼくらは明るい居間から、冷たく静かな廊下へ出た。
ぼくは、おばあちゃんと玄関まで、手をつないで歩いた。
歩きながら、順に電気を点けていく。ぱちりと音が鳴るたびに、廊下は明るくなり、その次の角も明るくなり、そして玄関も明るくなった。橙色の暖かい光に包まれながら、ぼくらは歩いた。
ぼくは上がり框に腰掛け、靴を履く。するとおばあちゃんも、突っかけを履いて、土間に降りた。先に行って、玄関の戸を開けてくれる。
開いた先は、霧と、真っ暗な闇だった。
ぼくが立つと、戸の脇に立ったおばあちゃんは、残念そうな顔をしていた。
「一緒に行ってあげられたらええんやけど」
そう、言ってくれた。
ぼくは、おばあちゃんのそばまで行くと、そっと抱きついた。
「おばあちゃん」
ぼくは、おばあちゃんの柔らかなエプロンに顔をうずめる。おばあちゃんはすごく、やさしい匂いがした。ぼくはおばあちゃんにひたいをすりつけて、もう一度言った。

「ありがとう」
おばあちゃんも、ぼくを抱きしめてくれた。背中に当たるおばあちゃんの手が、心地よかった。
ぼくは泣いた。泣ける限り泣いた。
もう二度と、泣けなくなってしまう気がした。
おばあちゃんは、ぼくの頭を何度も、何度もなでてくれた。暖かく抱きしめてくれた。
ぼくは泣いた。
最後まで泣いた。

そうしてぼくは、家を出た。
外は、何一つ無い暗闇だった。
ぼくは後を振り向く。
おばあちゃんは玄関のそばに立って、手を振ってくれていた。
ぼくも振り返す。
もう少し行く。また、振り向く。
おばあちゃんは、まだ手を振ってくれていた。
ぼくは出来る限り、大きく手を振った。一生懸命に、おばあちゃんのために手を振った。
ぼくは、歩いた。

家の灯火とおばあちゃんが手を振る姿は、小さくなりながら、ずっとある。
けれど、やがて霧の中に、見えなくなった。

3.
陽は歩いていた。
霧は暗くなるほどに力を増す。黒く広がり、あるべきものを隠す。

石段の前から、町へ向かって歩く。その途中、道沿いには齋夜の家がある。もう帰っているだろうかと、陽は目を凝らす。

けれどそのとき、家は見えなかった。灯りも点いていない。音も何も聞こえない。

訪ねる気も起こらず、陽はそのまま通り過ぎた。

急速に夜が広がっていく。

齋夜の家から少し歩くとまた別の家があり、ここは光が漏れていた。その隣もまたそうだった。その脇を、陽は歩いていく。光が漏れているといっても、家の形はまるで見えない。四角く窓の形に霧が光っているだけだ。そばに寄っても、ブロック塀があるだけだった。おおよその自分の位置を確認しながら、陽は歩いた。

町の角まで来る。左には、川とそれに架かる橋がある。すぐ脇の角地は診療所、つまり陽の家だ。陽はそこを右に曲がり、通り過ぎる。

町の中を進む。もう夕食刻だ。食器の鳴る音が聞こえる。何かを煮る音が聞こえる。炒める音も聞こえる。そして今、人々の歓談の声も聞こえる。

これに違和を感じる自分に気づき、陽は笑いを漏らした。

歩く。

暗闇の中には街灯もなく、ただ道に沿って家々の灯りが点々と続くばかりだった。

――なあ。

ふいにどこからかねこの鳴き声が聞こえ、陽はびくりと身体を震わせた。

――あはははははははは。

そして、どこかの家から大きな笑い声が漏れる。聞こえてくるどの声も、無駄に陽気で大袈裟で、耳障りだった。うるさい、と歩きながら陽は思った。

やっぱりあの五人の間だけで言葉が通じていることは、幸福だった。聞きたくない言葉、聞く必要のない言葉、聞く価値のない言葉に、触れずに済んだ。

これから、そんな言葉は無限に増大していく。そして、自分の足を絡め取る。

厭だった。

陽は歩く。町の中の大きく真っ直ぐな道を進むと、次第に上り坂になる。その坂も上り続ける。もうこの辺りだと周囲に家も灯りもないが、慣れた道だ。九年間、ずっと通い続けた道なのだから。見えなくても分かる。

上り詰めると、そこは学校だ。

この前来たのは祭の前々日だから、四日前になるか。

何ヶ月も前のような気がする。

学校の敷地内は、完全に灯り一つ無い。けれど校舎に用があるわけではないので、構わず陽は進む。歩き続けて校庭を突っ切る。向こう側には、海に面して錆びたフェンスがある。

校庭の隅に、朽ちたフェンスの戸があった。陽はそれを開ける。錆び付いているにも拘わらず、聞き苦しい音を立ててそれは容易に開いた。齋夜がしばしば開けているからだろう。それに、昨日の朝にも陽が開けたばかりだ。

抜けた先には小道が続く。道の右側は雑木林で、左側は海に向かった崖になっていた。こんな危険な場所だから、こどもたちが入らないようにと元々はあの戸にも南京錠が掛かっていた。しかし、こどもたちが学校からいなくなった今、その必要もない。開け放たれている。

間違えて少し左に逸れれば、たちまち崖から転落する。普段なら、雑木林の側に手を伸ばして、足下を確かめながらゆっくりと進むところだ。ましてこんな霧の中である。

だが陽は、周囲をろくに確かめることもなく、普段と変わりない足どりで、さっさと歩いた。

波の音が聞こえる。

やがて足下が石畳になる。そこで立ち止まり、陽は周囲を見回す。よく見ると、少し離れたところにぼろぼろの手すりのついた階段があった。そちらへ向かい、陽はそれを上り始めた。

上る途中も、なあなあなあなあ、と鳴き声が足下からしきりに聞こえた。ときおり、のどの鳴る音や、威嚇する声もある。ねこが何匹も丸くなって、段の上に寝ているのだ。ここは、島中のねこのねぐらだった。

上り終える。そして、陽は上方を見上げる。

大きな灯台の影があった。

古い石積みの建物で、塗装はとうの昔に剥げ落ちて、黒い汚れがあちこちにこびりついていた。海鳥が作った古い巣の跡が残っていたり、苔がびっしりと張り付いたところもある。天気のよい日なら、そんな光景を見ることが出来た。

しかし今は、何も見えない。強く潮のにおいが感じられるだけだった。

陽は奥へ歩いていった。その途中にも、ねこが足下を横切るように過ぎ去る。邪魔をしてくるかのようだった。半ば手探りで進み、ようやく目当ての場所へと辿り着いた。

陽の目の前には、木戸が朽ち落ちてただの穴と化した入り口がある。全体はコンクリート造りの箱のような、殺風景な建物である。これは監視所という。元々は、灯台守が交代で住むために建てられたものだったが、数十年前、灯台がその仕事を終えると同時に、監視所も用を失った。その後も撤去費用がなく、放置されている。窓ガラスも割れたまま、この建物はねこのすみかになっていた。そして今、他に住む者がいる。

陽は中に入った。

入るなり、すぐに陽は鼻を手で覆い顔をしかめる。ひどい臭いだ。ねこの糞と小便の強烈な臭気が立ちこめている。霧でじとじとしているため、余計に鼻についた。足を進めると、靴の下で水音がする。壁のコンクリートについた、泥か塵か分からない湿った何かが手に残る。真っ暗な中、探り探り進み、足下に転がっていた木箱か何かを蹴り飛ばした。派手な音が鳴る。暗闇の中、見えないねこたちが騒いだ。思わず陽は、天井を見上げる。

気づかれたろうか。

割れた窓から、風の音が漏れ入ってくる。

やっと見つけた木の朽ちかけた階段を、陽は上った。

上った先、二階の部屋からは、小さな光が漏れていた。

小さく揺れる、蝋燭の光だ。

昨日の朝、齋夜の家へ行く前にここに来たときには、誰もいなかった。しばらくねこと戯れてから、陽は帰った。そのときに、机の上に積み上げられた大量のマッチと蝋燭には気づいていた。おそらく昔の灯台守が残していったものだろう。

何をしに自分はここへ来たのだろう、と陽は改めて思った。
得られることなど何もないのに。
部屋の中を覗き込む。
そこには、揺らぐ火に照らされる、痩せこけた髭だらけの男がいた。
彼はもう、何年もここにこうして暮らしている。暮らしているという言葉はあまり適切ではない。生きているとも言い難い。ただ、いるだけだった。
マッチを擦るだけの理性は保っているらしい。
背もたれの無くなった椅子に座り、蝋燭の炎を見つめながら、彼は首を前後に揺すっている。悪意もなく意志もないうなり声の中、稀に言葉が混じる。
「和月」
身体を揺すっている。
彼は未だに、失ったこどもの夢を見ている。
普段は何を食べているのだろうか。つまらない疑問が陽の頭をよぎる。陽の祖父は生きていた頃、食べ物を持って彼の話を聞きに行くことがあった。一度だけ、陽はそれについていったことがある。齋夜も一緒だった。祖父がどれだけ話しかけても、目は合わない。何もない辺りを熱心に見つめて、彼はぼそぼそと、いつまでも話し続けていた。当時の陽はそれを聞いてお経を思い出し、それから経文に書かれた蟻の連なりのような文字を連想した。そして、ひたすら不安を感じた。そんなどうでもいいことだけは、今でも思い出せる。
あの時、齋夜はどうしていただろう。
もしかすると齋夜は、陽の祖父が死んでからずっと、彼に食べ物を与えていたのかも知れない。
彼を見て、齋夜は何を思うのだろう。
今目の前にいる彼から聞き取れる意味のある言葉は、和月という名だけだった。
陽は一歩部屋の中へ踏み込む。だが、彼は何の反応も示さなかった。
ただ、揺れている。
陽は彼の少し後ろに立って、彼をじっと眺めている。

ふと、陽は、自分がここへ来た理由を理解した。

陽は、彼が羨ましかったのだ。

彼は逃げ出すことが出来たのだから。

彼は、抜け出したのだ。自分の子を失ったときに、彼は自分の精神の砦を切り崩した。妻は島から逃げたが、彼は固執した。新たな居場所を探すことが、彼には出来なかった。

陽が以前、兄から聞いた話だ。

彼は本来、島の電気設備管理のため、電力会社から赴任してやってきていた。せいぜい数年、少なくとも彼の子が小学校へ上がるまでには、また本土へ越していくはずだった。当然ながらあまり本意ではない仕事だったが、これに耐えれば少し上のポストに就くことが出来るはずだった。そんな将来に期待を寄せながら、彼もそれなりに島での暮らしを楽しむようになりつつあった。

その予定は、数年後の夏の日に一変した。

彼はあらゆるものを憎んだ。まず島を憎んだ。満足に捜索も出来ないような豊かな自然を持つ島に怒りを感じ、島に伝わる下らない祭を恨んだ。赴任を命じた会社は当然のこと、神隠しなどという前近代的な言葉を平気で口にする島民も、信じられなくなった。元来線の細い、偏執的な人間だったのだ。次第次第に行動は破綻を来す。狭い島のこととあちらこちら勝手に入り込んで子を探す。出会い頭に相手にわめき散らす。妻の制止を受けると、妻にも矛先を向けるようになった。妻は早く忘れて、別のところに移りたいと願った。こんな島だ、森に迷い込んだとも海に落ちたとも知れないし、人目につく場所で見つからず半年も経てば、幼いこどもは生き延びることは出来ない。分かり切っていたのだ。だから妻は、早々に諦めた。諦めるほかなかった。けれど彼は、そうできなかった。島に固執した。恨みを抱くことは、かえって彼に島への執着をもたらした。上から命じられた仕事だから、などと言って憎んでいたはずの会社に急に律儀になり、島から出られないと主張した。実のところ仕事はろくに出来なくなってい

たが、そんなことは関係なかった。その後さらに半年ほど耐えた後で、妻は本土へ買い物に行くと言ったきり、帰ってこなくなった。けれどもう、彼には関係なかった。同じところを何度も、繰り返し探した。そんな彼によると、最もあの子がいる可能性があるのは灯台の監視所だった。あの子はねこが好きだ。海も好きで、小さい頃から浜辺へ連れて行くとよく喜んだ。どちらも見えて雨風がしのげるところは、監視所しかない。彼なりの論理だった。何度も何度も何度も探しに行った。いなければ、次いるかも知れないと考えた。いつ行ってもいない、自分は実にタイミングが悪い、そう言って彼は笑った。大いに笑った。確実を期すため、彼は監視所に移り住むことにした。彼にしてみれば、実に適切な判断だった。こうして彼は、灯台の監視所に住むようになった。そしてかれこれ十年ほど待っている。こどもは帰ってこない。

たまに島の他の場所を探しに行く。もしかしたら、と思うからだ。あちこちをあてもなく彷徨う。そして監視所へ戻る。戻って後悔する。しまった、自分が出ているうちに和月は来ていたに違いない、自分はなんて馬鹿なんだ、こんどこそしっかり待つぞ、と思う。

けれど、島はそれくらいの期待を抱かせるだけの人知れぬ場所をいくつも持っていた。どれだけ探しても、飽くことなく可能性を求めうるだけの雰囲気をたたえていた。人に、万が一の希望を見せてくれるのだ。彼は探し続けた。

だから、島からは出られなかった。

彼は島に囚われた。

多分に噂と兄の偏見憶測が混じった話だったが、信憑性はあった。

そうして彼は今、陽の前で、子の名を呟いている。

昨日ここへ来たとき、自分は何を思っていたのだろう。陽は考えた。

最初は単なる暇つぶし、興味本位だったか。

あの時は霧がこの部屋の中まで入り込んでいて、独りでしばらくぼうっとしていた。

そして、そう、彼の気持ちを想像したら、

そのままのめり込んでいったのだ。
さっき思い出した彼の過去には、陽の昨日の想像が入り交じっているかも知れない。
そして、憧れたのだ。彼の今に。
何もかもから逃避したい。
自分の曖昧模糊とした人生を終わらせたい。
幸福になりたい。
そう思った。
陽はずっと、自分に失望していた。二年前、あの事があって以来、陽は自分の茫漠とした性格を強く意識し、それにうんざりしていった。その場その場でいい加減に物事に対処し、奥底に確固たる思いなど何もない。問題が発生したらそれなりに解決するだけだ。いかんせん、それですべてうまくいってしまうのだから質が悪い。周囲からの信用は増す一方だった。島にいた中学生までの間に培われたその性質は、もう変えようがなかった。
高校でもそうだった。元々大して勉強をやる気はない。将来への計画など何もない。志望大学も別にない。あの高校を受験したのも、親の薦めを受け入れただけだ。ただ、テスト期間だと言われればきちんと勉強する。模試だと言われれば予習をする。君ならあの大学だと言われればまあいいかなと思う。医者になるんだろうと言われたらそうですねと応える。それで結果が出てしまう。個々の問題はすべて成功裏に解決する。周りの人間にしてみれば、至極結構なことだ。外見上はこの上なく優秀で真面目な生徒だ。それは、部活でも寮生活でも同じだった。
けれど陽には何もない。
それで、齋夜まであんな目に遭わせてしまった。
齋夜は怒ってなどいなかった。当然だ。そういう性格だからだ。自分と同じように、流されるように生きる。希望も期待も理想も夢も特にない。ただ、陽より要領が悪い。だから、今のような状況に追い込まれてしまった。
いや。
陽が追い込んでしまった。
去年の夏、帰ってこなかったことを、最後の喧嘩で齋夜はなじっていた。

今までははっきりとは口にしていなかったけれど、ずっと気に病んでいたのだろう。
でも、陽にしてみれば当然のことだった。
あんなことをしておいて、帰ってこられるわけないじゃないか。
自分がいない間、どれだけ齋夜が苦しんだか。そして、やるべきことから自分がどれだけ眼を背けているか。本当なら、齋夜は自分のことを恨むべきだ。憎むべきだ。二度と会いたくないと思うのが普通だ。だから、最後の喧嘩であの言葉を聞いたとき、陽は怒りながらもどこかで奇妙な安堵を感じていた。自分はずっと逃げていたのだ。
そしてなにより恐ろしいのは、

あの子だった。

あの子が、どこまでも、追いかけてくる。
幾度となく悪夢に見た。
授業中にも、部活の間にも、ただ街を歩いているときにも、ふと蘇るのだ。
ふわりと白いあの子の姿が、目の前にはっきりと、浮かび上がる。
忘れようと思っても、島から逃げ出しても、その姿から逃れることは出来なかった。
恐怖と、泣き出したくなるような重圧だった。

全部自分のせいだ。
許されない。
逃げ出すことは出来ない。

自分にはもう、何もないのだ。だから、目の前にいるこの男に憧れた。
すべてから逃げ出すことに、彼は成功したのだ。
それを確かめに来た。
果たして、彼は幸福なのか。
「和月」

陽の望みを、彼はすべて叶えているのか。
「和月」
自分も、彼のようになればいいのか。
「和月」
そうすれば、満たされるのだろうか。
その時。
不意に、目の前の彼は、立ち上がった。
陽は動けない。
彼は、全身恐ろしく汚れていた。擦り傷や切り傷、痣も、そこかしこに見える。服は原形を留めていない。元の色すら、よく分からない有様だった。長く伸びた髪も髭も、洗っていないのがよく分かる、べったりと、こびりつくような照りをしている。身体は黒く茶色く垢まみれで、骨と皮しか残っていない。ひどいのは顔だった。頭骨の形がそのまま出ている。頬も目もへこみ、肌はごわごわと見苦しく、口周りも痩せすぎて皺が寄っている。陽の親とそう年齢は変わらないはずなのに、もう六十過ぎにしか見えなかった。
彼は、陽の方を向いて言った。
「見た。見たんだ」
陽は何も言えない。
「和月が、いた」
陽は何も言えない。
「歩いていた。そこの。その。神社を。稚児の服を、着て」
陽は何も言えない。
「名前を呼んだのに、どこかへ、森へ、行ってしまった」
陽は何も言わない。
「和月」
白い着物を着た美しいこどもが、森の中を、今も独り彷徨い歩いている。
自分のせいだ。
「和月」
陽は彼と向き合っている。
彼にもう理性はない。

彼はすべてを捨てて、すべてを手に入れた。
陽はじっと、彼の顔を見つめる。
すると、彼は笑った。
にっこりと、満面の笑みだった。

彼は、幸福なのだろうか。
自分は、幸福になれるのだろうか。

陽は考えている。

10.

石段の前に、ぼくは辿り着いた。
石段は全部で二百二十一段ある。ぼくは一段目に足をかけた。木の陰、夜の闇、漂う霧で先は見えない。しかし、進まなくてはならない。
二段目。
よく分かっていた。いつかはこうしなければならなかった。
でもぼくはなにもせず、同じ場所で足踏みを続けていただけだった。
三段目。
灯りもなく手すりもなく、霧に包まれて何も見えない。けれど、一段一段足下を確かめながらゆっくりと進めば、上ることは出来るのだ。それに、ここはよく知った場所だ。小さい頃から、数え切れないほど来た。
二年前のことをぼくは思い出す。ぼくも、陽も、十五歳だった。もう二年も経った。
体調を崩して何度も中学校を休んでいたぼくを、陽は大先生を連れて見舞いに来てくれた。眉を下げ、心配そうな顔だった。おばあちゃんはもうそのころには調子を悪くしていて、ぼくが面倒を見てあげなければならなかったから、とても助かった。
思い浮かぶ陽の顔は、今よりずっと幼い。
そしてぼくを看てくれた大先生の顔は、いつ見ても変わらなかった。理知的な、どことなく茶目っ気のある表情で、四角い眼鏡を掛けていた。髪

は全体に白髪が交じった灰色だ。いつでも思い出せる。
そしてその年の秋に、大先生は亡くなった。
あれから、二年も経ったのだ。
もう半分まで段を上った。まだ鳥居は見えない。腰掛けて、少し休む。
和月ちゃんがいなくなってからも、もう十一年経つ。
あの祭の日のことも、思い出せる。
ぼくは立ち上がり、また上り始めた。
和月ちゃんは白いお稚児様の着物を着せられて、すっかり喜んでいた。まだ小さくて上手く舌は回らなかったけれど、とてもはしゃいでいた。肩まで届くつややかな髪が揺れて、綺麗だった。それが、祭の日の昼だった。杜さんの家で、晴れ姿のお披露目があったのだ。
杜さんと奥さんの笑顔は記憶にない。ぼくもまだ六歳だったし、かわいい和月ちゃんを見て、一緒に遊んでいるばかりだった。いや、ぼくを連れてきたおばあちゃんが、杜さんと話し合っていたからだったろうか。もうはっきりとは思い出せない。
その夜、和月ちゃんは姿を消す。
祭が始まって一時間ちょっとするとぼくは眠くなって、おばあちゃんに連れ帰ってもらった。そして夜中、たぶん一時頃に杜さんが、青い顔でうちの戸を叩いたのだ。おばあちゃんが玄関口で話を聞いていた。ぼくはそのとき起きてから後、眠れなくなってしまったので、朝までおとなたちが探し回っている様子を、居間の窓から眺めていた。そうして徐々に、何が起きているのか理解した。
衝撃を受けたぼくは、その日から軽い熱を出した。元々身体が弱かったし、祭の興奮や寝不足も祟ったのだろう。なかなか治らず、気づいた頃には騒ぎも収まりだしていた。一人杜さんだけが諦めきれずに探し続けていて、ぼくらも遊んでいるところを捕まえられて、繰り返し尋ねられた。
心当たりはあった。
でも、言えなかった。
だって、秘密の場所なのだから。
百九十九。
二百。

あと二十一段。
そして、二年前もそうだった。
いつものように一人あの場所へ行ったとき、ぼくは、
和月ちゃんを見つけた。
木の陰にそっと隠れた和月ちゃんの白い着物は、胸に刺さり、驚き、ぼくはどうすればいいのか分からなくなった。
それから、気分が悪くなったのだ。
誰かに言うべきだった。でも、やっぱり言えなかった。
絶対に、誰にも言えなかった。
どちらも、知っているのはぼくだけだ。
今、ぼくは鳥居をくぐる。
境内には霧が充ち満ちている。恐ろしいまでに真っ暗だけれど、霧は月からのわずかな光を取込みそして強める。目が慣れれば、見当はつくようになる。
巨大な社の姿が浮かび上がる。
ざくざくと砂利が鳴る。ぼくは歩いた。いつもと同じ場所だ。分かっている。
社の裏手へ回る。森を前に、闇は深まる。
きっと、誰も見つけることは出来ない。
けれど、ぼくだけは分かる。
ここだ。
連なる木々の中、他の誰にも気づかれないただ一つの場所。ここから入るのだ。
お父さんから教えてもらった。ここからでなければ森に迷って、戻れなくなってしまう。
知っているのは、ぼくと、陽と、
和月ちゃんだけだった。
ぼくは森に分け入る。連綿と続く木と草が身体に当たる。真っ暗で何も見えない。気をつけなければ、張り出した木の枝が目をつくかも知れない。
用心しながらぼくは進んだ。
草葉が髪にまとわりつく。それに今日は、いつもと違ってひどく歩きに

くい。服装が悪いのだ。こんな服、もう何年も着ていない。ひたすら進む。
枝が腕に刺さる。葉が足を切る。たぶん血も出ている。
それでも、止まるわけにはいかない。
痛かった。
そして、森は一度にひらけて、
あの場所に出る。
ぼくは入り口に立つ。
円の中心へ向かってなだらかに傾ぐ坂、
土、
樹、
その景色は、不思議なほどにはっきりと見えた。苔が光っているのだろうか。それとも虫が光っているのか。霧も薄いようだった。
森全体が、美しい緑に光る。
円く広がる広場に、六本の樹がそびえる。
そしてその中心には、石のベンチがある。
ここは、神様のおわす場所なのだ。
ぼくは静かに坂を下る。足下は軟らかな土と苔に覆われていて、心地好かった。霞む山の中は、涼しく清浄な空気が生きている。ぼくは息を吸い込む。身体が冷たく鎮まる。
やがてベンチを越え、目前に静やかな森を臨む。
ぼくは、もうここまで来てしまった。
帰ることはならない。
戻ることは許されない。
ぼくは、言った。

「おいで」

木の陰に、白い影が見える。
顔がのぞく。
綺麗な長い黒髪の、小さなこどもだった。
真っ白な着物を着ている。

ずっと、分からなかった。
あの子が何を思うのか、ぼくには分からなかった。
いつ見てもただひたすら綺麗な顔は、まるで意志も感情も持たないかのようだった。
けれど、ぼくは優しい顔で待つ。
やさしく、ほほえんで。
あの子はゆっくりと、足を踏み出す。
一歩一歩、こちらへ歩いてくる。
そして、ぼくと同じ場所へ降り立つ。
そうだ、ぼくは、
この子を迎えに来たのだ。

ずっと分からなかった。
この子がなんなのか、ぼくは分からなかった。
何を言っているのか、ずっと分からなかった。
ぼくの言葉は、ひとつとして伝わらなかった。
けれど、今なら、
許されるだろう。

煩わしさにずっと留めていた髪を、ぼくは解く。
落ちる長い髪は肩にかかり、ぼくが首を振ると柔らかに揺れる。
あの子は、初めて顔を上げると、嬉しげな顔をして、
ぼくの元へ駆け寄る。
あやうげな足どりで、

そして、
小さな両の手で、
ぼくのスカートにすがり、
言った。

書肆奇想堂　http://kisodo.web.fc2.com/

「おかあさん」

そうだ、
ぼくが、
この子を産んだのだ。